

幸せならワークライフバランスは上手く保たれている

山川 有子

山川皮ふ科院長

憧れていた医師になってからは必死に働き、産休直前まで大学病院の当直をこなし、出産1カ月前まで外来診療をしていました。出産後は2カ月で完全復帰し、夜の帰宅は20時を過ぎることは当たり前で、復帰直後から当直をもこなしていました。仕事が多忙で、産後に十分、授乳も搾乳もできなかったため、乳腺炎になって高熱を出したこともあります。

もっとも辛かったのは、主人がアメリカ留学中だった24年前のことです。小学2年生の息子、1歳の娘、子どもを世話してくれていた私の両親、家族全員が風邪で高熱を出してしまいました。子どもたち2人は、私の勤務していた大学病院小児科病棟の個室に一緒に入院させていただき、私は仕事の前、昼休み、仕事終了後に子どもたちの病室で看病をしていました。自分も体調が悪くなり、消灯後の夜遅く、1人で自宅に帰るときはフラフラ。本当に倒れる寸前で、気力のみで乗り切りました。

しかし辛いことばかりではありません。皮膚科医としての仕事は非常に充実して楽しいものでしたし、子どもと一緒にご飯を食べる、お風呂に入る、寝る、遊びに行く、という普通の生活が何よりも楽しく、幸せでした。当時はワークライフバランスなどという言葉もありませんでしたし、そのようなことを考える余裕もありませんでした。時間が足りない毎日でしたが、私にとって人生の中でももっとも充実していた、仕事と生活のバランスをそれなりに上手くとっていた、よき時代だったのかもしれませんが、ワークライフバランスというものは、充実した仕事と楽しい私生活がバランスよく保たれ、幸せでいられるのであれば、十分なのではないでしょうか。

無我夢中で走り切った18年。考えるところがあり、平成18年7月に開業をいたしました。その開業前日、突然、私の義兄の悲報が入りました。義兄も医師で、まだ47歳の若さでした。当日はクリニックの内覧会でしたが、泣きはらした私の目は真っ赤でした。開業にお通夜や葬儀と、慌ただしくたいへんな1週間。かつて義兄が教え諭してくれたのは、医師は健康を保たなければいけないことでした。その後、私は小さな病気をいくつかしながらもなん



とかクリニックを続けることができます。開業は日直や当直がなく、時間的には余裕ができるよいところもあります。

いま、時代は変わり、子供たちは社会人となり独り立ちしました。これから少しは自分のために時間を費やすことができそうです。趣味のガーデニングに没頭し、庭をみては自我自賛しています。そして、若いころは忙しくて行けなかった、あるミュージシャンのコンサートで全国を巡り、いわゆる追っかけをしています。

ますます歳をとることを考えると、少しずつ、ワーク>ライフからワーク≤ライフへとそのバランスをシフトさせてもよいのか、などと思っています。